東宝『ヘアスプレー』　写真提供：東宝演劇部

［ミュージカル］

コロナ禍に抗って

萩尾 瞳

コロナ禍中の混乱も3年目となった2022年、溜まったエネルギーや鬱屈を放つかのように、一気に公演数が増えた。とはいえ、コロナ禍に翻弄され、やむを得ず公演中止や休演に追い込まれるケースも続出する。一方で、オリジナル・ミュージカルが続々と登場し、日本のミュージカル界の底力を見せた。

来日公演復活と大作の公演中止

2022年のミュージカル界は、恐る恐る様子見をしながら、それでも果敢に公演実現に向かって邁進してきた。コロナ禍の打撃を最も受けたのは来日公演だったが、それも2月の『雨に唄えば』来日公演が先陣を切り、動き始めた。英国カンパニーによるこの舞台で、主演アダム・クーパーが土砂降りの雨の中朗らかに歌い踊るシーンを見た時、雲間から差し込む希望の光を見たような気持ちになったものだ。国内の公演復活はもとより、コロナ禍の

壁を超えて劇場文化を守りたいという心意気があふれる舞台でもあったから。

来日公演は、アメリカ・カンパニーの『RENT』『コーラスライン』、同じくアメリカからの『シカゴ』『ブロードウェイ・クリスマス・ワンダーランド』など、数は全盛期より減ったものの、着実に戻ってきている。世界的な災禍を乗り越えようとするミュージカル界の、ひとつの指針とも言えそう。

国内の大型ミュージカル公演も次々に開幕した。帝劇の『ミス・サイゴン』と『エリザベート』はどちらも2020年に中止せざるを得なかった公演の復活である。「プラチナ・チケット」と呼ばれるほど、チケット入手困難な人気公演だ。けれど、どちらも出演者のコロナ罹患や隔離ルールに縛られ、しばしば休演に追い込まれ、チケット・ホルダーを嘆かせてもいる。

人気のミュージカル公演は、主演級キャストも引力が大きいのは確か。でも、今後はアンダースタディ（特定の役の代演者）やスイング（いくつもの役の代演者）をもっと生かして、公演を続行する方向にはっきり舵を切るべきだろう。人気スター目当てもいるが、作品そのものに触れたい観客が大勢なのだ。ことに全国公演では、初めて見る作品をワクワク待ちかねていた観客が多いはず。コロナ禍の長期化に伴い、代役公演も少しずつ増えてきてはいるのだが。

コロナ禍のあおりでいくつもの公演中止があったけれど、松本白鸚主演ミュージカル『ラ・マンチャの男』が、わずか７回しか上演されなかったのは、ファンにとってもカンパニーにとっても痛恨事であった。約１か月を予定していたこの公演は、1969年の染五郎時代からタイトルロールを演じ続けていた白鸚の「ファイナル公演」と銘打たれていたのだ。惜しむ声があまりに多く、2023年に異例の復活公演が決まったのは、不幸中の幸いだった。

話題作初演と復活公演

２年の歳月を経て、ようやく日本初演された大作ミュージカルが『ヘアスプレー』と『ジョセフ・アンド・アメージング・テクニカラー・ドリームコート』だ。どちらも過去に来日公演はあったものの、日本人キャストによる日本上演は初めてである。

ことに『ヘアスプレー』は、主演の渡辺直美が海外在住ということもあり、復活公演は嬉しい驚きだった。主人公のキャラクターが彼女以外考えられないほどぴったりだったのだ。ジェンダー、人種、外見といったあらゆる差別を蹴飛ばしてしまうこの舞台では、黒人役の俳優が濃い目のメイクをすることなく、役を演じていたのが印象的だった。これはブロードウェイの製作側からの要請だったのだが、人種表現は今後も日本のミュージカル界の課題になっていくだろう。

アンドリュー・ロイド＝ウェバーの初期作品『ジョセフ～』は、ジャニーズ事務所所属の薮

宏太が主演。2020年の上演予定が2年遅れて復活したのだが、予想より客席が薄めだったのに驚いた。おそらくは、通常のミュージカル・ファンの観客層よりも年齢が低いジャニーズ・ファンの比率が高かったせいだろう。コロナ禍でファンが「遠征」しにくい状況が響いたようでもある。

日本初演ミュージカルは、ひと頃ほどではないものの着実に登場している。なかでも、ジェンダー差別を描いたオフ・ブロードウェイ・ミュージカル『The View Upstairs ―君と見た、あの日―』が時代を突いて興味深かった。『ビー・モア・チル』は2019年ブロードウェイ初演作の上陸。生きにくさを抱える高校生たちのドラマで、楽曲が世界中でヒットしたことが早々の日本初演を後押ししたよう。

驚きの日本初演作が『フラワードラムソング』と『バイ・バイ・バーディー』。どちらもブロードウェイ初演から半世紀を超える作品だ(『フラワードラムソング』は1992年に宝塚歌劇団がバウホールで上演しているので、正確には日本初演ではないのだけれど)。両者とも大手や老舗ではない中小や新進プロダクションによる上演。今後も、新進勢力による掘り起こし作の上演は増えていきそうだ。

そういえば、『ファンタスティックス』の“競演”も面白い現象だった。オリジナルの脚本・作詞家トム・ジョーンズが書き直した最新版『ファンタスティックス　ボーイ・ミーツ・ボーイ版』が小プロダクションで初演された直後、この作品を日本初演した東宝が55年ぶりに『ファンタスティックス』を上演したのである。片やジェンダー・フリー版、片や原型版。いずれにしても、作品の根強い魅力を印象付けるできごとだった。

2022年一番の収穫は『ガイズ&ドールズ』ではなかろうか。1950年ブロードウェイ初演のこの作品は、84年に宝塚で日本初演されて以来、宝塚と東宝で何度も再演されてきた人気作だ。今回の東宝製作版は、ブロードウェイで最も旬の演出家マイケル・アーデンがアップデートしたもの。帝国劇場の舞台機構をフルに使ったデイン・ラフリーの舞台美術が効果的で、

東宝『ガイズ&ドールズ』　写真提供：東宝演劇部

楽しさあふれる舞台になった。

少ないながらいまや上演作の一定数を占める韓流ミュージカル。22年の日本初演作では『ルードヴィヒ～Beethoven The Piano～』が記憶に残った。楽曲は魅力的だが脚本が粗い、という韓流ミュージカルにありがちな弱点が出たのは惜しかったけれど。

多彩なオリジナル・ミュージカルが続々

2022年ミュージカル界の特色を一言で言えば、オリジナル・ミュージカルが激増したことだろう。ずいぶん長い年月、日本のミュージカル界ではオリジナル・ミュージカルへの憧憬と必要性が言われてきた。創造の力が培われた昨今、オリジナル・ミュージカルも増えてきたところへ、コロナ禍という疑似鎖国が拍車をかけたようでもある。

劇団四季は満を持して『バケモノの子』を初演、約1年のロングランを決めた。細田守監督の人気アニメーション映画を原作に、高橋知伽江が脚本を書き、富貴晴美が作・編曲し、青木豪が演出。先の『ロボット・イン・ザ・ガーデン』でも組んだ英国のトビー・オリエが、パペット・デザインとディレクションを手がけた作品だ。コロナ禍での海外スタッフとのコラボの困難は想像に難くないが、それを乗り越えて劇団四季の新章を支える作品を生み出したのだった。

とても魅力的だった舞台が『リトルプリンス』。サン＝テグジュペリの人気小説『星の王子さま』のミュージカル化である。もともとは音楽座が1993年にオリジナル・ミュージカル化、再演を重ねてきた作品。それを、東宝が上演したのだった。93年初演でプリンスを演じた土居裕子が東宝版でも再び同じ役で、歳月を超越した演技を見せたのは驚きだった。

こうした既存作を含めオリジナル・ミュージカルの上演本数は、いまやミュージカル公演の半数を軽く超える。いや、観客動員数や上演回数では及ばないかもしれない。でも、全公演をほぼオリジナル・ミュージカルが占める宝塚作品をカウントすれば、観客動員でも公演回数

劇団四季『バケモノの子』　撮影：阿部章仁

でも、おそらく海外ものを超えそうだ。

その宝塚作品では、久々に再演された『Never Say Good Bye ―ある愛の軌跡―』や『グレート・ギャツビー』が、アップデートを経て光を放った。また、浅田次郎の大河小説を巧みにミュージカル化、総勢87人という宝塚しかできない出演者が揃った『蒼穹の昴』が印象的だった。

オリジナル・ミュージカルはあまりに多く、公演期間も短いものも多いため、全てをカバーするのはなかなか困難。とはいえ、主だったもの、注目作は概ねカバーしているので、その中からインパクトの強かった作品を数本挙げる。まずは、長塚圭史が初めて手がけたミュージカル『夜の女たち』。溝口健二監督の同名映画（1948）をもとに長塚が上演台本・演出を手がけ、ユニークなキャスティングで上演された作品である。

特筆すべき作品は、イッツフォーリーズの『洪水の前』。同劇団のレパートリーでいずみたくミュージカルの代表作が、25年ぶりに鵜山仁の新演出で上演されたのだった。原案はブロードウェイ・ミュージカル『キャバレー』と同じくジョン・ヴァン・ドルーテンの『私はカメラ』とクリストファー・イシャーウッドの『さらばベルリン』。それを第二次大戦直前の中国・大連にいる日本人たちの物語に翻案したもので、ドラマも楽曲も古びないのに感嘆したのだった。

『スラムドッグ$ミリオネア』は同名映画の原作小説『Q&A』がベース。『四月は君の嘘』は映画化もされたコミックのミュージカル化。ちょっと意表を突かれたのが、ミュージカル『東

イッツフォーリーズ『洪水の前』　撮影：岩田えり

ホリプロ『東京ラブストーリー』　撮影：撮影：田中亜紀

京ラブストーリー』だ。コミック原作の同名TVドラマはバブル時代に人気だったけれど、なぜ今?感は拭えなかった。もしかしたら、2021年初演で22年に早々に再演された『フィスト・オブ・ノーススター～北斗の拳～』などと並べて、ホリプロのアジア進出戦略の一環かもしれない。単なる憶測に過ぎないけれど。

ミュージカルの殿堂ともいうべき帝国劇場が、建て替えに伴い2025年からしばらくクローズするニュースは、ちょっぴり衝撃的だった。日本のミュージカル界で先駆的役割を果たした俳優・宝田明の訃報も悲しかった。そういえば『ファンタスティックス』のエル・ガヨ役は彼の当たり役だった。悲しい事件やニュースもさまざまあったけれど、日本のミュージカル界は新たな局面に進んでいる。そんな希望も持てた2022年であった。

はぎお・ひとみ

映画・演劇評論家。新聞記者を経てフリーの評論家に。朝日新聞のミュージカル評を担当するほか雑誌、新聞に映画評、演劇評を執筆している。著書に『ミュージカルに連れてって!』（青弓社・1992）、『プロが選んだはじめてのミュージカル映画―萩尾瞳ベストセレクション50』（近代映画社・2008）などがある。読売演劇大賞、菊田一夫賞、松尾芸能賞などの選考委員を務める。